

子どもの家事参加態度に作用する要因に関する研究(第2報)

○高知大教育 鈴木敏子 高知学園短大 西本恵子

高知大教育附養 舟橋久子

目的 子どもの家事参加が乏しい実態が指摘され、そして家事労働の子どもの身心の発達に与える意義が見直されている状況の中で、私たちは、どのような生活背景が子どもの家事参加を規定しているかを知り、親子関係、家庭教育の留意点を見出そうとしている。昨年(1978年)の第1報では、小学校高学年(5・6年)児童について、居住地の特性別、子どもの性別に、家事参加の自己認識の差をみた上で、母親のほたらきかけ方、父親の家事参加の程度、家庭科の好き嫌い、が、子どもの家事参加に影響していることを示した。第2報では、家族構成、母親の職業等の家庭の属性、および発達段階による影響とみていく。

方法 第1報と同じく、高知市内の住宅化地域にある1小学校、農村的地域にある2小学校の、1・3年生の父と母、5・6年生の父と母と児童を対象に、1979年12月初旬に実施したアンケート。分析数は、1年生159組、3年生159組、5・6年生316組。

結果 家庭の属性の中で一定の傾向がみられたのは、母親の仕事の有無、きょうだいの数別であり、母親が就労している方が、きょうだいが多い方が、より家事に参加している傾向がある。学年がすすむにつれて母親の意図的ほたらきかけが少しずつ増えており、特に5・6年女子に対する家事役割遂行の期待が、とも強い。総じて、全体として子どもの家事参加が少なくなっている現状の中で、いく分たりとも子どもを家事参加に導いているのは、母親が就労しているというような客観的条件、家庭科の好き嫌いによって差があったように子どもの主体的条件のいかん、そして何よりも両親の意図的働きかけや家庭内の家事分担状況にあると思われる。